



# 誘惑ヘヴン

Yu-waku Heaven

天悪ぱにっく!

小説 茶瓶 挿絵 葵渚

二次元ドリーム文庫 / PDF立ち読み版

第一章 正義の天使騎士、堂々参上…!?

第二章 天使のココロ、女悪魔の誘惑

第三章 猛襲！ 悪魔っ娘!!

第四章 綾音とリリム

第五章 ただれた淫欲の日々

第六章 バタバタの「平穏」

## 登場人物紹介

Characters



### セシル

天から恭平を守るために派遣されてきた天使騎士。本当はもっと長い名前だが、人間では発音できない上に呼びづらいので、恭平がただ名をつけた。

たちばなあやね  
**立花綾音**

幼い頃から恭平と家族同然に暮らしてきたお姉さん。情にもろくさっぱりして頼りがいのある姉御気質。世話好きで尽くすタイプ。

### ローズ・バルバロッサ

妖艶な女悪魔。あの手この手で恭平の精を奪い取ろうと狙ってくる。

### リリム

ロリロリボディで恭平を狙う小悪魔。強力な魔法を使うことも可能。

あんどうきょうへい  
**安藤恭平**

平凡で基本面倒くさがりだが、おせっかいな所もあって親切心は人並み以上の少年。神の因子を持つ人間でもある。

少年に見せた凶暴性、裏表を感じる性格、予感は確かにあった。しかし、仲良くなったリリムがまさかという気持ちの方が強い。だが、水の入ったグラス越しにリリムの真の姿が映し出され、恭平は目を見開いた。

小さな牙をペロリと舐め、背中には翼のように広がる赤茶色の深いマント。露出度の高い衣服から覗く身体には魔法の文様が彫られ、その蒼い瞳が爛々と輝いていた。確かに悪魔の特徴を持った少女。その淫蕩な本性を今露わにしようとしていたのだ。

「クスクス……♡ キョーのオチ○チン……とつても喜んでるみたい……もつといっぱい可愛がつてあげるね……♡」

歌うような楽しいリズムで、きゅつきゅつと脚の裏をペニスに押し付けてくるリリム。その刺激に完全に勃起上がってしまった。刺激にズボンの中で窮屈そうにびくつく。

「くあッッ！」

あまりの快感に腰が浮いた。リリムはその小さな脚の裏を押し付けるだけでなく、巧みに肉棒の裏筋をなぞり、丹念に揉むようにクイクイと刺激を与えてくるのだ。

（くそ……ッ……なんだこれ……）

ズボン越しとはいえ初めての感覚に、戸惑う以上の愉悦を感じてしまう

「リリム……うッ……いい加減にしないと……怒る……ぞ……」

「こっちはもうブンブンみたいだね♡ ほおら、もっと気持ちよくしてあげる……」  
ぴちゃ……れろお……

「うおおおおおッッ！」

突然冷たいモノがペニスに這う感触が沸き上がり、喉の奥でうめき声を上げてしまった。  
(な……なんだ今の……!?)

何の前触れもなく、性器に鋭い快感が走り腰が蕩けそうになってしまふ。下腹部を圧迫する脚コキ攻撃は続いているというのにだ。

「ウフフ……ビックリした？ 今のリリムの得意技。こうやって相手が意識させたモノをれるれるれるれるれる……ッッ！」

「うひいッッッ!!」

先端がぬめったものに弄くり回される。尻が浮き上がるかのような快感。テーブルに熱い吐息を吐きかけてしまふ。

「相手の感覚につなげちゃうことができるのでーす。だから今この、そふとくりーむは……キョーのオチ○チンと一緒に♡ ぴちゅちゅば……ッッ！」

あくまで遊びをしているような気軽さで、ペニスの先端を廻り回してくる舌先。ソフトクリーム先端部分を舌が舐めると、亀頭にピリッと快感の電気が走った。そこから下に舐め進むとペニスの裏筋がこそぎ取られ、必死に我慢しないと精を漏らしそうになる。

「うつくうッッ……!! はあ……ッッ」

舌で鈴口をぐりぐりとえぐられ、身体をびくつかせる。リリムのような小さい子供にペニスを廻られている、という屈辱感が恭平の興奮を一層高めてしまふ。

「ほらほら……もう抵抗しないの？　こんな小さな子にオチ○チン舐められて、踏まれてるのに、ボッキして感じちゃって…悔しくないの？」

カリ首にぴちゃぴちゃと舌を這わせながら、何も知らない童女のようなあどけない声で、嘲りの言葉をぶつけてくる小悪魔。そう、子供といっても悪魔なのだ。人間を墮落させる性技には長けている。恭平を手玉にするくらいはわけない。

（くそ……こんな子供……に……いッ！）

悔しい表情を浮かべながらも、顔が快楽に歪んでしまう。それほどまでに、少女が与えてくれる快感は甘美だった。恭平の弱いところなどわかっているとばかりに、敏感な部分をペロペロと舐めまわし、ペニスがズボンの中でひととき膨らんだ瞬間を狙って、ペニスの胴部をニーソックスに包まれた足裏でぎゅうっと圧迫してくるのだ。

柔らかい足の裏と指が充血した肉棒の形をなぞるように、ぐいぐいっとつまみ、踏みつけるその屈辱感。そしてそれを遥かに上回る気持ちよさ。恭平の精袋の中にぐつぐつと熱い液体が溜まっていくのがわかった。

「ほら、キョーもうイキそう？　ぴゅぴゅって射精しちゃいそうなの？」

コケティッシュな笑みを浮かべながら、舌先をチロチロと動かし、

「うはあああッ!!」

腰がぐくぐくと震える。お腹の底が蕩けるような、ねっとりとした快楽が、下半身全体に広がっていく。それを見たりリムがさらに丹念に、情熱的に先端部分を舐め廻る。



(くッッ……もう出ちまう……ッッ！)

腰の奥から何かがこみ上げてくるのがわかった。リリムの脚の裏が射精を促すようにグイグイと勢いよく先端を踏みつけ、亀頭部をしごくように激しく擦ってきた。

ぴちゃぴちゃ……ズズズズッッ!!

さらに、すするような下品な音を立てて肉棒の先端が徹底的に撚られる。

もうこれ以上耐えられなかった。腰の奥で精液がマグマのように煮えたぎり、一瞬でも早く射精の快楽を味わいたかった。

「クスクス……ちっちゃい子にオチ○チン踏まれてイッちゃうんだ……ズボンの中に白いザーメンびゅっびゅーって射精しちゃうの？　もう出ちゃう？」

射精を煽るようにいやらしい言葉を耳にかけてくる。このままイってしまったてはいけな  
いのに、そんな気持ちと裏腹に、尿道をドロドロとした精液が駆け上がってくる。

「リリムちゃん、だめじゃない。そんな下品な音立てて……」

もう耐えられないと思ったそのギリギリの瞬間、綾音が戻ってきた。注意されたために、ソフトクリームが口から離れ、同時に脚も股間から離れる。

(…………ふうう……助かつ……た……)

「ふふ、セシルさん早くカレー食べたって文句言ってた。おみやげが必要かも」

救世主の登場に救われた恭平だったが、股間は既にパンツが濡れてしまうほどに勃起してしまっている。これをどうにか収めなければならぬのだが。



「あ、スプーン落としちゃった……」

リリムが突然テーブルの下に潜り込む。

（スプーン使うのなんかあったっけ？ ……ッッ!!）

恭平は驚愕した。テーブルの下に潜り込んだリリムがすぐ股の間に来ていたのだ。

リリムはズボンを突き破らんばかりに硬くなったペニスをズボンの上からそっと掴むと、そのまま上下にしゅっしゅっとしごき始めた。それと同時に、

『ずずうぴちゃッッ!! ずちゅばあふちゃっ…ちゅぶぶっ…ずずずッッ!!』

凄まじい淫音を立ててペニスの先端がズボン越しに吸引される。

「うあああッッッッ!!」

身体をギュッと丸め、快感を堪えようとするが、我慢できたのは一瞬だけだった。恭平のペニスを知り尽くしているかのように器用に、そして妖艶に舌と唇が蠢き、精液を吸い上げようとしてくる。射精の予感に震える恭平を追い詰めるように胴部に頬擦りする。

「ほおら…びゅっびゅってしちやえ♥ ぶじゅるるるるるッッ」

淫らかな囁きと共に卑猥な音をたて、亀頭がちぎれるほどにきつく吸いつかれる。

びゅくん!! びゅぶぶッッ!! びゅくうッッ!!!

尿道が吹き飛んでしまうかのような射精感。頭の中が白くチカチカと点滅し、身体全体が痙攣した。腰が勝手に浮き上がり、足の裏がきゅっと丸まってしまふ。声を我慢しようとかがみこむと、より一層射精の快感が深まっていく。

それでも出来るだけ痛くしないように、優しくセシルの下着を脱がしていく。ブラジャーのカップから乳房がポロンとまろび出る光景がたまらない。いつも服越しでしか見つめたことのない、セシルの双丘は、まるで芸術品のように優雅で、それに反してたぶたと揺れる様はたとえようもなくいやしかった。思わずそのままセシルの膨らみに手を伸ばし、揉み始めてしまう。

「ん……はあ……あ……恭平……そんな……」

セシルも戸惑いながら、しっかりと恭平の指を感じているようだった。さらに反応を確かめるように両手でむにゅむにゅと揉みつぶしてみたり、先端の乳首をくすぐってやりたりすると、女騎士の口から切なげな声が漏れた。

「やめてくれ……はあ……ッ……そんなにしたら……んふうッ……我慢できなくなってしまう……」  
顔を真っ赤にして、そう訴えるセシルが可愛くて、余計に乳房を揉む手に力が入ってしまふ恭平だった。

下半身にも手を伸ばすと、そこは既に洪水状態だった。

「セシル……気持ちいいか……？」

聞きながら、セシルの下着の中に指を突っ込み、刺激に慣れていない粘膜をくちゅくちゅと弄ってやる。

「あ……ッ……気持ち……いい……ッ恭平が触ってくれるから……」

可愛く喘ぐその姿は、恭平の理性を失わすのに十分すぎる魅力だった。恭平は手をセシ

ルの頬に添えると、改めてその目を正面から見つめた。

「セシル……いいか？」

「……………好きに……………してくれ……………ッ」

セシルは頬をますます赤く染めるとそつと目を伏せ、そう応えた。

そつと身体を白いマットの上に寝かせ、股の間に身体を入れる。ギュッとマットの端を握るセシルのスカートを手早く脱がすと、すぐにぐしょ濡れになったパンティが目の前に現れた。

「セシル、こんなに濡れてる…」

ちよつと意地悪をするように白いパンティのスジの部分をつつとなぞってあげる。

「ひん…ッッ！　だって…んん…ッ…恭平が触るから…身体が言うことを聞かない…」

普段からは想像もつかない猫なで声を上げるセシルにドキドキしながら、ゆつくりとパンティを下ろしていく。太ももを開かせ、秘部へと顔を寄せる。

（うわぁ…………）

セシルの女性器は取れたたの果実のように、鮮やかでキレイなピンク色をしていた。

「今まで、ここに触ったことある…………？」

ツンと、指先で襷をつつくと内股がビクッと反応する。セシルのさわやかな体臭と汗が入り混じった匂いが恭平の鼻につき、何ともそられてしまう。

「ひゃうッッ…………触ったことは…ない…………天使はそういった行為は禁じられている…んは

あんッ……だから……人に見せるのもお前が初めてだ……」

自分の性器をじっくりと見られるのが恥ずかしくて、真っ赤になった顔を両手で隠してしまう。そんなセシルが可愛くて、ぱっくりと開いた花弁に息を吹きかけたり、指でクリトリスをくすぐったりと細かく指技を見舞う。肉果実の奥からはさらにどろっとした粘液が漏れ出し、恭平の指を熱く濡らした。分厚いマット生地に白い愛蜜が円形にシミを作る。愛撫に身体をガクガクと震わせていたセシルが、恭平の腕に手を添えてくる。

「ああ……ッ……恭平……私は……もう……我慢できない……頼む……ココを……奪ってくれ……」

恭平の目を見つめ、切なげに囁く女天使。マットに寝そべり大きく股を広げ、自分から陰部の襷を指でクパッと開きながら。

（もうたまんねえ………！）

女騎士の精いっぱい誘惑にクラッときた恭平は、ぐいっとムチムチの太ももを抱え持つと、既にガチガチの状態の肉棒で正面から女の部分に狙いを定める。

「いくぞ……ッ！」

そうだけ告げると、自身を女の肉の中に埋め込んでいく。

ずぶぶッ

「んく……くふああああッ………!!」

セシルの眉間に皺が寄った。ペニスの行く先に強い抵抗を感じる。結合部から赤い血が滲んでいるのが見えた。

「あ……血が………！」

天使であるからには誰かと肌を重ねた経験はないのだろうか、改めてセシルが処女であることを意識すると、何かこみ上げてくるものがあつた。

「大丈夫だ……続けてくれ……んん……私は……この痛みも……嬉しいんだ……」

涙を浮かべながら懸命に告げるセシル。痛みを感じていることを考えて、恭平はあくまでゆつくりと、慎重にペニスを突き進めていく。やがて、肉棒の全てが膣の中に収まる。

「これ……で……恭平の女に……なれた……のか？」

少し涙を浮かべながら呟くセシル。痛みで身体がこわばっているのがわかった。

「無理すんな……じつとしてる。痛いんだろ？」

恭平はなるべく痛みがないように、奥に埋めた肉棒を軽く動かす程度のゆつくりしたピストンを心がけた。太ももの間から、女性を下に敷く正常位の態勢であるから、こちらでの加減はしやすかった。

「平気……だ……恭平が私の中にと、思うと……とても安心する……。それより、もっと動いていいんだぞ。恭平の好きなようにしてくれ……」

健気に恭平の腰の動きに合わせてくるセシルが愛しい。

腰の動きは止めたままで、そっと手を胸に伸ばし、優しくこね回す。それだけの淫戯でも身体を敏感に震わせ、喘ぎ声を漏らしてくれる。

「あん……んん……ッ……嬉しい……あふうッ……もつと触って……え……ッ！」

(うう……こいつ……こんなに可愛いかったのか……ッ！)

ただでさえ暴発寸前だったペニスが、セシルの魅力にさらに昂ぶってしまう。腰が勝手に前後し始めてしまうのが止められない。

「恭平……もつと動いて……んはぁッ……恭平をもつと感じたい……んんーッ……それに……身体がゾクゾクして……何かおかしいんだ……」

結合部からあふれ出る粘液の分泌量がぐつと増してきたように見えた。軽く腰を動かしているだけなのにぐちゅぐちゅと粘音が立ち、膣内粘膜もいやらしくぬめり始めているのがハッキリと肉棒にもわかる。

「っ……それじゃあもつと激しくいくぞ……覚悟しとけ」

ずずずつと奥まで埋めていた亀頭を引き上げる。柔らかく子供の肌のようにぷにぷにの粘膜が先っぽにまとわりついてくる感触がたまらない。

そうして、先端を残してペニスを抜ききると、あくまでゆつくりと、しかし一気に奥にまで挿入していく。

ずぶぶぶぶぶぶうっつ！

「ふああ……んんん……ああああッッッ!!」

奥に奥にと進むたびに、セシルの顔が徐々に歪んでいく。終いには顎を反り返らせて、金髪を振り乱す女天使。ギュッとキツイ締め付けを越え、亀頭の先っぽが奥へとたどり着くと、二人の腰と腰が完全に密着する。

「ああああ……ッッ……恭平の……いっぱいになってる……これがセックス……なのか……」  
少し苦しそうで、でもそれ以上に幸せそうな表情。先端で最奥をツンツンと突いてやる  
と、その顔がさらに快楽に歪む。

「奥に……つんつんって……んんんッ……つんつん……って当たってる……うッ……もつと、奥にまで……んはあ……ッ……恭平なので……いっぱいにして……くれ……えッ」

初めての快感に震えるセシルに軽く口付けると、胸の膨らみにも手を伸ばす。たふたふした弾力を手のひら全体で楽しみながら。時折乳首を指先でつまむ。

「あッ！ そんな……ッ、ああ……おかしくなる……ッ！」

ジュブ  
ツツ  
ぐち  
ゆツ  
ツ

腰の動きに合わせて響く淫音が一層粘度を増してきていた。ぐちゅぐちゅと泡立つ粘液同士が結合部に溜まり、二人の太ももを濡らした。ぎゅっぎゅっと膣内の粘膜を締め付け、敏感な反応を見せるセシルに、恭平の我慢もそろそろ限界だった。

「くっ……そろそろ……ッッ」

ペニスの先端があまりの快感で痺れ、腰が止まらない。スピードアップをした恭平のピストンに合わせるように腰を動かすセルも確実に絶頂への階段を昇っているようだった。「ああ……ッ……私の身体どうなってしまうんだ……頭がチカチカして……白くなつて……怖い……ッ……恭平……ッ！」

初めての感覚に、戸惑い泣きそうな顔で感じてしまっているセシルの手をそっと握り、

安心させると、さらに強く叩きつけるように腰を奥に突き入れていく。二人は真っ赤になって汗だくになりながら肉と肉をひたすらに擦り合わせた。

「ぐ……もう……出そうだ……ッッ！」

尻の後ろの方から湧き上がってくる甘美な感覚に身体を任せながら、さらに深い抜き差しを繰り返す恭平。

「ん………ああ………ッッ………腔内に………なかに出してくれ………」

快感に頭が痺れ、全身で感じながらも、そんなお願いをしてくるセシル。

「え………？　だって………」

腔内に精液を注ぐ、という意味を知っているのかという意味で見つめる。

「んんむんッッ………わかつている………あッ………お………お前のことを愛しい気持ち………が………苦しいんだ………どうにも収まらなくて。どうしても………お前の子が欲しいッ！」

潤んだ瞳で懇願され、恭平の興奮が頂点に達する。

「………ッ！　中でイクぞ！　思いつき中出しして孕ませてやる!!」

恭平の腰がブルブルと震え、射精直前のラストスパートをかける。セシルもまた切羽詰まった喘ぎ声を上げながら、必死に恭平の身体にしがみつき、腰を迎えていく。

「ああ………私も………くる………飛んでしまう………ッ………んんんんんッッッ!!!」

二人の身体が同時に痙攣する。恭平のペニスの先端が、ズンとセシルの最奥を貫き、それに對してギュッと強烈な締め付けを返してくる腔粘膜。





身体を軽く震わせて、軽い絶頂の波にさらわれる綾音。幸せそうな顔をしながら膣内射精の喜びに浸っていた。

「恭平！ 今度は…私に…させてくれッ」

二人の拙くも一生懸命なセックスに煽られたのか、女天使が勢いよく恭平の胸に飛び込んでくる。

「あーズルイ！ 今度はリリムの番だもん。ねえ、キョーってば…」

リリムも負けじと、幼くもコケティッシュな身体を恭平に押し付けてアピールしてくる。「それじゃあみんな一緒にすればいいじゃない♥」

そんな無責任な綾音の言葉のせいで、くんずほぐれつになる四人。仰向けに押し倒された恭平は身体全体をぶつけるような勢いで抱きついてきたセシルに正面から犯されていた。「ああ……恭平……んむう……もつとだ……もつと突き上げて……えッッ！」

熱烈に唇を求めながら、身体をすり寄せてくるセシルの金色の髪を撫でながら、舌を絡ませる。セシルの身体はどこもスベスベで、騎士として締まった肉体が女らしい弾力で恭平を楽しませてくれる。

「んん…ぴちゃ……う……セシル…んんちゅ…ッ…膣内が……締まるッッ！」

肌を合わせた回数ならセシルが一番だ。恭平の弱いところらわかっていると云わんばかりに、キュッキュッと膣内の入り口と、最奥を圧迫してくる。ペニス全体が膣粘膜にまわりつかれるような快感。唇を合わせながら、その快楽に浸る。

「うう……………おほ……………ッッ深い……………いッッ…恭平……………恭平……………いッッ!!」

子宮を押されるのが感じるのか深々とペニスを受け入れる度に、身体をゾクゾクさせる。恭平は亀頭を子宮に埋め込むように執拗に深いピストンを続ける。そうするともう我慢できないのか、泣きそうな顔でいく寸前の顔を見せてくれる。

「んん……………キョー君…あ……………そこッ…そこッ…もつといじって……………!」

綾音は折り重なる二人の上でリリムとキスを交わしていた。そうしながら、恭平の腕を股の間に挟んで、愛撫をねだってくる。ぐちよぐちよに濡れた膣粘膜の一点、綾音の弱点のざらついた膣壁を指の腹でさすってやると、身体をビクビクと震わせていた。

綾音の身体はまさにマシユマロのような、触れていると幸せになってしまうほどの柔らかさがあつた。特に胸を揉んでいるときの至福は誰もかなわないだろう。

「ん…あんッ……………キョー君は、お姉ちゃんのオッパイが一番好き…なんだもんね♥」

そんな事を言いながら綾音は魅惑のふくらみを恭平の身体にふにふにと押し付けてくる。  
「うう……………たまらん……………」

見ているだけでも興奮する魔乳が、これでもかと恭平の腕を、へそを、押しつぶしてくる。むにゅつと音がしそうなほど柔らかく乳房がつぶれ、柔らかい肌の感触が恭平に張り付く。まさに溺れてしまいそうなほどの豊かな乳房だった。

「へっへ……………キョー君…うっとりしてる……………このまま墮としちゃうぞッ♥」

さらに胸を押し付ける綾音に対抗するように、セシルの唇がぐいっと強く押し付けられ、

舌を激しく絡ませてくる。膣と腰の動きも性急になって、まるで自分を見て欲しいと言わんばかりに一生懸命に腰を上下させる。

「あは…キョー…たら乳首がピンピンになってるよ♥ リリムの指がそんなにイイ？」

リリムは時折ぴちやぴちやと綾音と唾液の交換をしながら、恭平の乳首をきゅつきゅつとつまんでくる。敏感になった両乳首を愛液を塗った細い指で弄くり回され、脳に響くほどに感じてしまう。

「ううッッ…リリム…うッッ！」

くちゅ…くちゅ…ッ。

ぴしょぬれになった幼い股間が腕に押し付けられ、こすり付けるように股が前後する。その心地よさにセシルの膣内でペニスさらに固くなるのを感じた。

「クスクス…リリムの身体気持ちいい？ ね、キョー。リリムが最高…でしょ♥」

リリムの身体はまるで幼い子供のようだ。しかしその小さな肉体に秘められた魔性は誰よりも深い。何よりその身体の使い方をリリム本人もわかっているからたちが悪い。あのちっちゃくてスベスベした身体を使って全身を愛撫されると、なんともいえない背徳感が恭平を昂ぶらせてしまうのだ。

「こ…子供…子供…子供…興奮するわけ…ううッッッ!!」

必死に強がろうとした恭平だったが、リリムに突然顔にのし掛かられ、口を利けなくなってしまう。少女の性臭が強烈に恭平の鼻腔を直撃する。



(うああ……なんていやらしい匂いなんだ……ッ！)

少女の肌から香る柑橘系の匂いと、濃密な女の臭いが入り混じり恭平の脳を痺れさせた。  
「アハハ どう？ ヘンタイのキョーにはたまらない責めでしょ？ これでもリリムにコーフンしない？ ほらほら♥」

ぐちゅぐちゅと濡れた花弁を押し付けるように小悪魔が腰を動かす。息ができない。わずかに入ってくる空気はリリムの臭いに満たされ、恭平の頭をぼーっとさせてしまう。

さらに乳首を指の腹できゅんっとつまみ上げられると、思わず精を漏らしそうなほどに感じてしまう。恭平は反射的に舌を突き出し、目の前の幼い秘粘膜に反撃する。

「キヤ……あ……キョー上手……ああんッ！ 気持ちいいよお……♥」

ぴちゃぴちゃと膣内を舐められるのが気持ちいいのか、リリムがさらに股間を押し付けてきた。それを心から味わうように、舌を長く伸ばし、瑞々しい肉体をむさぼっていく。

くちや……ずちゅ……ぬちゅッ……ぴちゅ……ちゅばあ……ッ

粘膜と粘膜が擦れあう音、舌と舌を絡め合う音、男の指先が秘粘膜をえぐる音。女の股が男の身体を滑る音、男の乳首を粘液だらけの指でくちゅくちゅする音。女と女が絡まる音。全てのいやらしい音が部屋の中に充満し、異様な性臭が立ち込める。四人の興奮は頂点にまで達していた。

「く……ダメだ……またイク……ッ！」

「私も……イク……イク……ッッッッッッッ!!!」

「あぁん……あうんッッ……私もいつちゃう……キョー君……キョー君ッッ！」

「リリム……リリムもう……飛んじやうううううう！」

セシルはグッと強く全身を反らしながら、綾音は泣きそうな顔で恭平の目を見つめながら、リリムは小さな身体を恭平に必死に押し付けながら、そしてそれを見ていた恭平も。

「イク————ッッッッ♥♥♥」

四人が同時に身体を震わせ、絶頂に達する。今日何度目か、数えるのも忘れるほどの精液を、セシルの膣内に叩き込む。恭平が絶頂に達するたびに、心底幸せそうな顔で受け止めてくれる女たち。恭平だけの、これ以上ないほどの素晴らしいハーレム。

三人の饗宴は、いつ終わるとも知れず、夜の一室を震わせていた。

「解放日」を過ぎついに平穩を取り戻した恭平たち。運命の日を超えて何かが劇的に変わってしまうかも、という不安はあったが、それも杞憂だった。とりあえず二人はすぐに帰ることはないと聞いて安心した恭平と綾音ではあったが、セシルたちの世界のこと、これからの生活のこと、問題は山積みだった。

「リリムちゃんはこれからどうするの？」

恭平を狙うのはやめたというリリムではあるが、悪魔の世界の方には色々知り合いやら、未練があるのではと、綾音が気遣う。

「んーどーしよっかな。でも魔界には戻らないよ。メンドーだし♥」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**



# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快なBlog**も更新中!
- 期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!



<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!

